

富士古文献の謎を解く

―宮下文書研究の現在―

伊藤健二

目次

- 1 はじめに
- 2 宮下文書とは？
- 3 宮下文書の内容と主題
- 4 宮下文書の真贋問題
- 5 宮下文書はいつ書かれたのか？
- 6 宮下文書は何のために書かれたのか？
- 7 古史古伝とオウム事件
- 8 偽史言説と学会
- 9 結語

参考1 宮下文書と神代文字、神代ことば

- ① 宮下文書に記された神代文字 神代文字は、象形文字？
- ② 宮下文書に記された神代言葉 神代言葉が方言に残っている？
- ③ 神代文字研究の歴史 学術研究者の神代文字に対する見解

参考2 宮下文書に書かれた富士山麓の歴史

- ① 日本の開闢物語 宮下文書には、全く異なった二つの開闢物語がある
イ 富士山に開闢からイザナギまで七代+十五代+七代の王朝があるとする文書
ロ 富士山から大陸へ神が天下り、その三代孫がイザナギとする文書
- ② 九州遷都 大陸との戦争の時代
- ③ 橿原遷都 神武天皇が国内を平定
- ④ 孝霊天皇時代 徐福来日し、富士高天原へ
- ⑤ 延暦、貞観の噴火 神都高天原は溶岩の下に埋もれる
- ⑥ 阿祖山太神宮の変遷 阿祖山太神宮は、中世に至るまで日本の中心

参考3 宮下文書に関する参考文献

伊藤健二：1947年横浜生まれ 藤沢市在住 1971年上智大学理工学部卒

2008年神奈川県を退職

- ・大学一般教養課程で宗教学、歴史学を学び、歴史と宗教に興味を持つ。退職後は各種講演会、学習会を通じて歴史と宗教の研究を進める。（一見宗教とは無関係な歴史上の事象でも、根底に宗教的基盤があることが多い。）
- ・日本徐福協会事務局長、神奈川徐福研究会事務局長、神奈川県日中友好協会会員、（一社）日中歴史文化交流センター会員、日本山岳修験学会会員
- ・連絡先：xufu@krd.biglobe.ne.jp

1. はじめに

宮下文書（富士古文献とも言う）は、謎が多いと言われていますが、写真撮影したものを製本して市販されていることもあり、研究が進んでいます。特に最近では、学術研究者も加わり、偽史問題が論じられるようになりました。今回は、偽史問題を中心に、現在の宮下文書研究の状況を解説し、考えたいと思います。これらの内容に関して、地元の研究者の皆様から、ご意見、ご批判をいただければ幸いです。

なお宮下文書に記された富士山麓の歴史及び神代文字に関する内容も、参考資料として添付しました。

2. 宮下文書とは？

宮下文書とは、明治16年（1883年）に富士山麓の明日見村（現富士吉田市）の代々神社の宮司を務めてきた宮下家で発見されたとされる膨大な文書類である。

宮下文書の内容は、古事記や日本書記のようなまとまったストーリーではなく、多くの文書の寄せ集めである。内容は神代から南北朝に至るまでの歴史、宮下家の系図の歴史などであり、古代の歴史の部分は神代文字で書かれていたものを徐福が翻訳したとされている。なお、大正時代、三輪義瀬（よしひろ）氏が、宮下文書を解説し、宮下文書のダイジェスト版として、大正10



保管状況 巻紙で木箱に収納

年『神皇紀』を発行した。

また、宮下文書を写真製本した『神傳富士古文献大成』が、昭和61年2月、八幡書店から発行され、富士吉田市立図書館などで見ることができる。

なお、『富士古文献』と『宮下文書』は、同じものとして扱うが、富士山麓の中世に関する古文献は、宮下文書以外にも存在するので、区分する場合もある。

宮下文書の歴史（この歴史は、宮下文書自身に書かれているものと、『富士文庫第一巻』に記載されている内容であり、史実かどうかの確認はしていない）

紀元前3世紀		徐福が神代文字で書かれた歴史書を翻訳。その後も徐福の子孫などにより、歴史が記される。
その後、江戸時代末まで		何度か転写され、また富士山噴火により罹災、相模寒川神社に移転。その後も時の支配者により何度か焼却されるが、写本が残るなどして、現在に伝えられた。
文久3年	1863年	火災発生 宮下源兵衛（14歳のとき）姉が天井の垂木に結びつけてあった「古文書」が入った箱を外に持ち出す。このとき、身内の者がこの箱を持ち去ろうとしたが取り返す。この騒ぎのため、家に残っていた他の宝物等は焼けてしまった。
明治16年	1883年	福地八幡旧社明神の祭典の時、宮下源兵衛と神官宮下荘斉の二人で箱を開けたが、その後再び封印。

明治 22 年頃		宮下源兵衛氏は研究を始めたが、再び封印。
明治 26 年	1893 年	愛知県の三輪義熙（よしひろ）氏が都留郡公証人役場に赴任 宮下文書を知り、研究を始める。
明治 39 年	1906 年	三輪義熙は、富士元宮浅間太神宮が、社格を以て祭られていないことを嘆き、明治天皇に上奏する。
大正 10 年	1921 年	三輪義熙が宮下文書のダイジェスト版である『神皇記』を発行
大正 11 年	1922 年	宮下文書の研究を目的とする財団法人富士文庫が設立。 翌年報告書『富士文庫 第一巻』を発行。 その後、関東大震災が発生するなどし、富士文庫は消滅する。



富士古文献の一部である「支那震旦國皇代曆記」の書き出し部と最後の署名

- 右は書き出し部分
 全て漢字であるが、漢文ではなく日本語文である。助詞の「と」は「登」、「の」は「野」「に」は「仁」、「を」は「尾」の漢字が当てられている。
 最初の三行目の途中までを、助詞をひらがなに書き換えると、次のとおりとなる。
 「蓬萊山の高天原天都洲より太昊伏羲氏、東陽婦人と供供、大陸の大中原に天降止り座、炎帝神農氏を生」
- 左は最後の署名部分で、記述文は、「孝靈天皇の七十六年十月十日に、後世への記録として、秦国人除の徐福、謹んで書き置く。」
 「安元二（1176年）丙申年八月中、寒川神社宝物蔵より借り受け写した。
 山宮二所明神大社 大宮司 宮下源大夫義仁謹記」

宮下文書の例

3 宮下文書の内容と主題

宮下文書は、古事記、日本書紀のように、まとまった歴史書ではなく、種々の文献の寄せ集めである。このうち古代史に関しては、秦の始皇帝の命で不老不死の霊薬を取りに日本に来たとされる徐福が書いた、との署名があり、「徐福文書」とも言われる。その後の歴史も徐福の子孫が書いたとの署名があり、さらに南北朝時代は南朝についての宮下家の先祖の歴史が語られている。全体から見れば徐福は脇役にすぎない。

宮下文書で一貫して主張しているのは、世界の開闢のときから富士山山麓の神都、高天原が日本だけでなく、世界の中心であり、さらに高天原の政治的、文化的な中核となるのは、宮下家の阿祖山太神宮であり、それは南北朝時代まで続く。例えば、都が富士山高天原から九州に移ったウガヤフキアエズ5 1代の時代も、神皇は即位式のために九州から富士高天原にやってくる。神武天皇以降は、富士高天原から三種の神器を大和へ持ってきて、天皇の即位式を行った。

これ以降も、富士高天原の太神宮は重要な役割を持ち、貞観の噴火で一旦は消滅するが、朝廷の保護により再建しているが、その後も変遷を繰り返し、南北朝時代までの記述がある。

4 宮下文書の真贋問題

宮下文書は一般には偽書とされているが、真実の歴史だと主張する意見もある。それでは、それぞれどのような考えで主張しているのだろうか。

(1) 徐福が書き、鎌倉時代に書き写したとする記載をそのまま肯定するもの

『探求幻の富士古文献』（今日の話題社 2002年12月）の「富士古文献偽書説を駁す」の中で、「帝は大日本国の諸人民の司」などの文句が近代の用語であるとの批判に対して、「私には新しい言葉とは思えない」など、根拠を示さず、また、思う思わないなど自分の主観で語っており、真贋問題に対応できていない。現在ではこのような主張は聞かれなくなった。

(2) 近世、近代に書き換えられたが、元の文書があるはずだとするもの

『富士王朝の謎と宮下文書』伊集院卿著（2014年3月学研）によると、文体や内容から、江戸時代に書かれたものだが、今は失われた原書がありそれを書き写した。その時に、当時の現代語訳で書き、また新たな物語を挿入した。また、徐福がインドに行き、仏教を学んだ、などという歴史的には考えにくい、誇張的な伝承も含まれている。偽書批判は完全にかわすことはできない。しかし仮に全てが江戸時代に書かれた偽書であることが判明したとしても、何らかの失われた神話や埋没した史実などの典拠があるのではないかとしている。

（「近世」、「近代」は、明確に定義されていないが、一般的には近世は安土桃山・江戸時代、近代は明治維新以降を言う）

(3) 近代に書かれ、歴史的な根拠がない創作であり、偽書とするもの

学術研究者はこの立場。使われている言葉、文法などが近代のものであり、明らかに偽書であるとして研究の対象としていなかったが、近年偽史言説が社会に悪影響を

与えているとして、研究に加わった。なお学術研究は、偽書であることを暴くのが目的ではなく、偽書が存在するという歴史的事実を受け止め、それがどのような精神世界を体現したものなのかなどの背景の研究を目的としている。

(『偽書学入門』(2004年5月柏書房)の「近代の偽書―“超古代史”から、「近代偽撰国史」へ」(藤原明著)による。)

(地元富士吉田での対応)

地元の徐福研究家の故羽田武栄氏は、著書『真説・徐福伝説』の中で、宮下文書に対して「あえて付言すると、ここには『富士古文献』(宮下文書ともいう)が保存されており、好事家の間で物議をかもしている。この地に古くから徐福信仰が根付いていたという証拠にはなるだろう」として歴史ではなく宗教現象としてとらえている。

また富士吉田市の土橋寿氏は、2012年12月に横浜で開催された神奈川徐福研究会主催の徐福フォーラムの講演で、宮下文書に対して、次の疑問を呈している。

「紀元前から富士山麓に王朝があり徐福が来たとしているが、富士山麓は王朝ができるほどの容積はなく、考古学的な根拠、他の文献の傍証もない。また、徐福一行の名前が日本人の名前である。」

青森県市浦村(現五所川原市)の和田家で戦後発見された「東日流(つがる)外(そと)三郡史」という古文書がある。これは裁判沙汰になったこともあり、学者も絡んで調査が進められ、結局この古文書は、これを発見した当人が書いた偽書であることが判明し決着した。

問題は、村の出版物である『市浦村史資料編』にこの偽書を取り入れたことだ。村の関係者も、内容から偽史であることに気がついてしたが、いろいろな条件が重なり、結果として村史に歴史資料として偽書を取り入れたが、これは行政として大きな失態であった。これに比べ、富士吉田市は、官民共に極めて冷静に対処している。

偽書とは(wikipedia)

「偽書(ぎしょ)とは、製作者や製作時期などの由来が偽られている文書・書物のこと。主として歴史学において(つまりはその文献の史的側面が問題とされる場合に)用いられる語である。単に内容に虚偽を含むだけの文書は偽書と呼ばれることはない。」
(古事記・日本書記は内容が史実でなくとも、著者や時代を偽っていないため偽書とはいわず、宮下文書は近代に書いたが古代に書いたと記されているので偽書とされる。)

5. 宮下文書はいつ書かれたのか?

宮下文書には、「人民」「海軍」「民族」「元帥」「大本営」「帝国」、「軍隊兵卒」、「政治」など、明らかに近代の用語が使われており、また文章も一見漢文風に書かれているが、実は現代語に近い和文である。決定的なことは、「宇家潤不二合世撰政記」に神武天皇即位の日を2月11日と書かれている。即位日をこの日に定めたのは、1873年(明治6年)であり、この日付が書かれていることは、宮下文書の少なくともこの文献「宇家潤不二合世撰政記」は明治6年以降と言うことになる。宮下文書の、これ以外の古代史の部分でも、くせ字や誤字が同じなので、同一人物によってかかれたものと推測され、これと近い年代で書かれたものであることがわかる。

『富士王朝の謎と宮下文書』（伊集院卿 著）によると、宮下文書原本には2月11日とは書かれておらず、大正時代に書かれた『神皇紀』の記者が書き加えたと書いたと推測しているが、宮下文書原文に明らかに2月11日の日付が記されており、著者はこの部分を見落としたと思われる。

宮下文書が、箱を開けて「発見」されたのは、明治16年であるので、書かれたのは明治6年から明治16年の間、ということになる。しかし「発見」後も再び封印されるとしているなど、経過が不明瞭であり、偽史『津軽外三郡史』では、発見者が発見後も書いていた例がある。宮下文書も明治16年以降も書かれていた可能性は否定できない。

「富士文庫」の理事でもあった神原信一郎は、未刊の書と思われる『吉野朝勤王秘史・宮下記録と其考証』で、宮下文書は発見者の宮下源兵衛によって明治以降にも偽作されたものがあるとしている。（この情報は、『偽書学入門』第四部 近代の偽書 藤原明著）による。）

宮下文書に用いられている近代の用語

- ・人民：幕末以降の和製漢語（ウィキペディア）
- ・海軍：新井白石が、1708年に使用したのが、最古の記録。江戸時代は「水軍」という語が使われる。
- ・国家：聖徳太子の17条憲法にも現れる古い言葉であるが、近代以降多用される。
- ・国民：古くから国司支配下の民、地侍・土豪の意味としても使われ、日本全体民としても使われた。近代以降多用される。
- ・民族：幕末以降の和製漢語（ウィキペディア）
- ・元帥：仏教の神、大元帥明王が語原とされ、中国で古くから使われた言葉であるが、日本で制度として使われたのは明治5年（1872年）から
- ・大本営：日本では制度としては1893年に設置。江戸時代以前は「本陣」

古史古伝と皇国史観

宮下文書全般に言えることだが、中国の三皇五帝の先祖が日本の富士高天原から中国の中原に天下って行った神様であり、徐福もその子孫であるとするなど、世界の中心が日本の神々と天皇家であるとする皇国史観が色濃く表れている。このような思想は、幕末の平田篤胤等の一部国学者系統の思想であり、明治政府の精神的な支柱となった。明治時代は、「世界の中で、歴史の上でも皇国日本が一番すぐれている」という皇国史観が「常識」であり、このことから宮下文書は明治時代に書かれたことを示すものと言えるだろう。

古史古伝は、この皇国史観をさらに拡大したものであることが、『日本の偽書』（藤原明著）に言及されている。『上記（うえつふみ）』では、神代に日本の神が中国に穀物の種を中国に賜わり、中国に文字を教えたとし、さらにイザナミ、イザナギの国作りでは、全世界の国土を創成したかのような記述になっているという。また『竹内文庫』では、日本人は世界の五色人の上に君臨する黄金人種で、神代は日本の天皇が世界を支配していたと書かれている。

6. 宮下文書は何の為にかかれたのか？

何のために『富士古文献』は書かれたかについては、謎があると言われているが、有力な説として、明治政府の神社の合併整理から来ている、というものだ。国は明治初年と明治末年の2回、神社の合併整理を行ない、社格を整理するとともに、無社格の多くの神社を消滅させた。20万社あった神社のうち7万社が取り壊されたという。社格とは明治時代、神社に対して行った官社、村社などの格付であり、それに洩れた神社は「無格社」とされ、明治末期の神社合祀で多くの無格社が神社合祀により廃社となった。当時の神社にとっては存続の危機にあったので、自社がいかに皇国にとって重要な神社であるかを説明する必要があった。『宮下文書』の主題は、天皇や神々の歴史、宮下家の系譜や、「阿祖山大神社」等の神社の話、宮下家が関わった南朝の歴史など、皇国と宮下家の神社であることは、多くの研究者から指摘されている。物語の中では常に全国の神社のトップである「阿祖山大神社」中心に置かれている。

「偽史を書く」というと、人をだまして喜んでいるようなイメージがあるが、そうではなく、宮下文書の著者は、明治政府の宗教政策の被害者であり、歴史の中での苦しい立場を理解する必要があるだろう。宮下家の小室浅間神社が社格を得られず、存亡の危機にあったことは、次の『富士文庫』の文書からも読み取れる。

「明治三十九年一月十五日、三輪義瀬は古文書に依り富士本宮浅間大神宮が洩れて社格を以て祭られざるを慨（なげ）き其御事蹟を明治大帝に上奏す。

大正三年二月三輪義瀬は宮下半蔵等を率先し郡内四百有余名の賛成を得て富士元宮浅間太神宮社格奉祀に関し貴衆両院に請願せしに衆議院の採択する所となれり」

7 古史古伝とオウム事件

オウム事件は、今年7月に13人の死刑が施行されたが、なぜこのような事件に至ったのかの解明は十分にできていないと言われている。ところで、麻原彰晃は古史古伝の一つであるが近代に書かれた偽書とされる『竹内文書』を研究しており、オカルト雑誌『ムー』の1985年11月号にも記事を書いている。また、富士山麓に基地を作ったのは『宮下文書』に影響され「神都」建設のためだという情報は、インターネットの記事で見られるが、根拠は確認できなかった。麻原彰晃と宮下文書の関係の信頼できる情報としては、『それでも心を癒したい人のための精神世界ガイドブック』（1995年太田出版）の中の対談記事の中で、宗教学者で中央大学教授（当時）の中沢新一氏が次のように語っていることだ。

「麻原彰晃が上九一色村を選んでいるということは、『秀真伝（ほつまつたえ）』とか古史古伝の問題が絡んでいると思います。麻原彰晃の座右の書というのは、『虹の階梯』という本、『富士宮下文書』つまり富士超古代文明についての文章です。」

中沢新一氏は麻原彰晃と直接会って話をしているので、この内容は信頼できるだろう。『虹の階梯』というのは、対談者の中沢新一氏自身が記した、チベット密教の修行の解説書であり、麻原彰晃は、まともな仏教書と古史古伝をミックスさせて独自のオカルト論理を形成させたのだろうか？

もちろん、偽史の信奉者が反社会的なカルト集団とただちに結びつくものではなく、オウム真理教は特殊な例ではあるだろう。しかし偽史の信奉者の、歴史学を含む社会科学を否定し、「自分達こそが真の歴史を知っている。」とする態度には、危うさを感じる。

8 偽史言説と学会

学術研究者がいい加減なことを言えば、批判にさらされるが、素人が何を言っても学術研究者は妄言につきあう暇はないので、無視してきた。宮下文書等の古史古伝（学術研究界では「偽史言説」としている。）を偽書として研究対象とせず、研究を続けたのは、在野の研究者たちであった。（在野と言っても、原田実氏、藤原明氏等は、学術的な研究であり、学会からも高く評価されている。）しかし最近、歴史的根拠がない『江戸しぐさ』が学教教育に取り入れられたり、偽史とされている『東日流外三郡誌』が村発行の歴史資料に収録されるなどの社会問題が発生、学術研究界も偽史言説を近代日本、現代日本の重要な一部を映す鏡として研究に参画し、2015年11月には、立教大学日本学研究所主催で、公開シンポジウム「近代日本の偽史言説 その生成・機能・受容」が開催され、神代文字問題や、ユダヤ同祖論問題などを現代の問題としてとらえ、宮下文書も含めて論じられた。（神代文字に関しての学会の見解は9ページ参照）

※この項の参考文献：『近代日本の偽史言説』（小澤実編）の「序章 小澤実」及び「第4章長谷川亮一論文」

9 結語

どんな歴史文献でも、百パーセント正しいということは考えられず、研究者は同時代の文献との比較（文献批判）、考古学的な傍証（間接的な証拠）などから検証することになる。宮下文書では、古代富士北麓に神都があったが、噴火の溶岩で埋もれたとされているが、地元の人言うには、溶岩は低いところに流れるものであり、全体を覆う事は無く、ここに神都があったことはありえない、としている。また、地元に残るほかの伝説などの言い伝えとの共通点があるという話は聞かれない。文献の研究は、単に字面だけで判断ではなく、このような地域や時代の背景も含めて検討すべきであろう。

私も宮下文書の古代史部分の大半を読んだが、真実を伝えている可能性はきわめて少ないと感じている。もし、宮下文書が部分的にでも、少なくとも中世にさかのぼれる文体があるとか、また歴史的に検証できる傍証があるのならば、その情報をいただきたい。

参考1 宮下文書と神代文字、神代ことば

① 宮下文書の神代文字

宮下文書では、約30の「神代文字」が記載されている。なお、原文では、「神代文字」ではなく、「神代分事」という題目が使われて、「チンダイブンヂ」とふりがなが振られている。「分事」という単語は、辞書には見当たらないが、「事を分ける」の意味としては、「条理をつくす。筋道をたてて言う。」だ。しかしこの「神代分事」は、やはり、「神代文字」のつもりで書いたものであろう。宮下文書原文は、別の部分に「神代文字」ということばが、一か所使われていることを確認できる。

具体的に書かれている「神代文字」は絵文字が約三十字、数字関係が十数種であり、ヒト、アタマ、テ、ハラ、アシなど、カタカナでフリガナが振ってある。これらは全て名詞の絵文字であることが特徴である。

宮下文書以外の秀真伝（ほつまつたえ）のような多くの「古史古伝」も神代文字で書かれたとしているが、これらはいずれも仮名のような表音文字である。宮下文書も絵文字は、これがどのような動詞や助詞の文字と組み合わせて、具体的な文章になるかの例示や説明はない。

宮下文書原文の神代文字は 5 ページに原文の写真版を示すが、鮮明ではないので、『図説 神代文字入門』（原田実著）から借用した。

なお、宮下文書原文の神代文事（神代文字）に関するでは、建久3年（1192年）、徐福から7代の子孫が記したとの署名がある。

② 宮下文書の神代言葉

宮下文書では、「神代分事」に続いて「神代ことば」が記載されている。5 ページに写真版の原文を示した。

90ほどあり、読み取れない字を除くと、次の単語が確認できる。

テンシタ、ヲ火サマ、ツキサマ、ヲトヲ、ヲカア、ヲぢ井、ヲバア、ガキ、イビキ、イクベ井、ヨスベ井、サセベ井、タノムベ井、ヲソカンベイ、ヲドサレベイ、ヲソロシイ、コマタ、カナシイ、白カンベイ、ワルカンベイ、ヤルベイ、ヤメベイ、スケベイ、ワラワレベイ、ヲコルベイ、ヲコラレベイ、ナクベイ、ナカセベイ、コトワルベイ、ハゲマスベイ、ハヂシメベイ、アサクウベイ、ヒルクウベイ、ヨルクウベイ、アカルクナルベイ、クラクナルベイ、子ベイ、ヤスムベイ、ドヲシベイ、ハンカイルベイ、ユウベイ、ハナスベイ、キクベイ

ここに並んでいる単語は名詞もあるが、大半は東日本の方言である助動詞の「べい」となっている。辞書に記載さいされている「べい」の説明は次のとおり。

（「デジタル大辞泉」より） [助動] べい
《推量の助動詞「べし」の連体形「べき」の音変化》「べし」に同じ。
「さあ、行くべい」
「がいに手間を取るべい所で難義をしべい」〈雑兵物語・上〉
「おのらが口から言ひにくくば、身共が直に言ふべい」〈浄・千本桜〉

[補説]「べい」本来の連体形の用法は平安時代から見られるが、終止用法を有する「べい」は、中世以降、東国を中心に行われた。現代語では、「べい」の音変化形「べ」「ぺ」の形を含めて、関東・東北方言などで終止用法として、多くは推量・意志・勧誘の意で用いられる。また、「べい」の接続は、「べし」と同じく活用語の終止形（ラ変型には連体形）に付くが、しだいに複雑化し、江戸時代の東国方言では、カ変動詞の未然形・連用形、サ変動詞の連用形、上一段・下一段活用の未然形（または連用形）にも付くようになる。

この「べい」は、次の記述により、宮下文書が発見された富士吉田の方言でもあることが確認できる。

ウィキペディアより

甲州弁（こうしゅうべん）は山梨県で話される日本語の方言である。山梨県内でも御坂山地と大菩薩嶺を境に東西で大きく方言が異なっており、西側の甲斐国中地方では東海東山方言（ナヤシ方言）の一種（国中弁）が、東側の郡内地方では西関東方言の一種（郡内弁）が話されている。両者を分ける代表的な特徴は、意志・推量の表現であり、国中地方では「ず」「ずら」、郡内地方では「べー」「だんべー」を用いることである。

「神代ことば」は、宮下文書が発見された富士吉田地方の方言であり、宮下文書が主張しているのは、ここが、神代の時代から続く高天原があった日本の中心地であり、現在も神代時代のことばが残っている、ということだろうか？

③ 神代文字研究の歴史

「神代文字（じんだいもじ）」の意味は、大辞林によると次のとおり。

漢字渡来以前、神代から日本にあったといわれる文字。日文（ひふみ）、天名地鎮（あないち）、阿比留（あひる）文字などの類。鎌倉時代、神道家がその存在を主張し、江戸中期に一部の国学者の間などで存在説が盛んになったが、現代ではそれらはいずれも後代の偽作として否定されている。神字。

神代文字が学術的に否定されている理由は次のとおり。

- ・漢字流入以前に存在したという確たる証拠がない。
- ・もし漢字流入以前に存在したのなら、かな文字を使うようになった理由が説明しにくい。
- ・ほとんどの場合、音数が47音ないし50音しかなく、現在より多かったはずである古代の音韻数と合わない。しかも、その多くは一種の単音文字である。明らかに「いろは歌」や50音表の成立以降に作られたものと考えられる。
- ・平田篤胤の挙げた「アビル文字」（別名「ヒフミ」）のように、明らかにハングル文字をモデルにして作られたものが存在する。

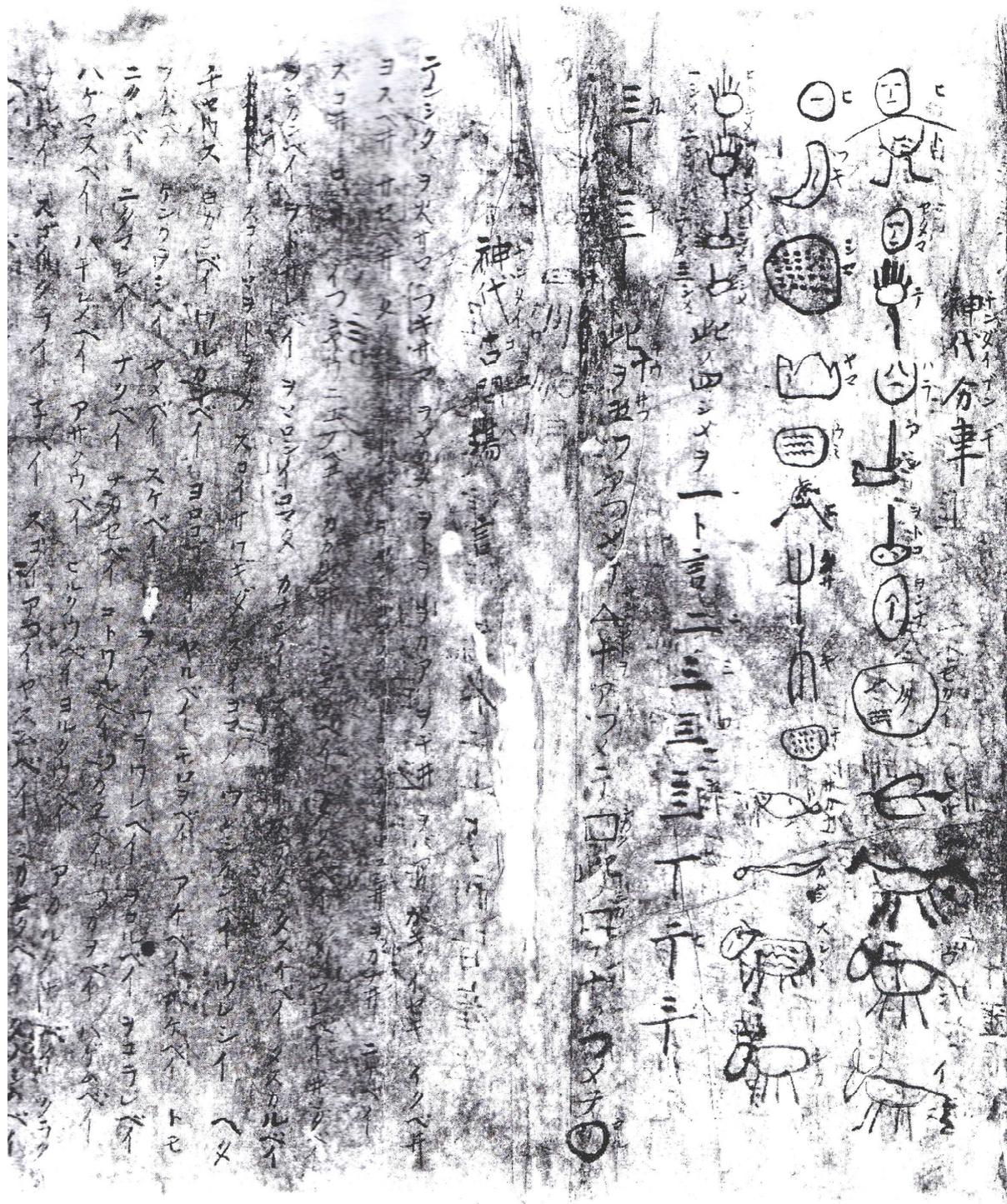
神代文字は、歴史学者や考古学者から提起されたのではなく、江戸時代に平田篤胤（ひらたあつたね）などの国学者から提起されて、議論が盛んになったものだ。天皇を中心と

する皇国日本が世界の中心であるとする国学者にとって、歴史の上においても、日本の文化が中国より劣っていたことを認めるわけにはいかない。文字も日本本来のものがあつたはずだ、として平田篤胤は神代文字とされる文字を収集し、江戸時代後期の1819年、『神字日文伝疑字編日文伝附録』を記した。

皇国史観の国学は、明治維新やその後の対外戦争を遂行する上での精神的な支柱となり、敗戦まで続いた。戦時中の昭和17年～18年、内閣に設けられた「肇国聖蹟調査委員会」では、多くの学者も委員として参加させられ、天孫降臨（神が天上から地上に降り立つ）からの神代御三代（ニニギ、ヒコホホデミ、ウガヤフキアエズ）を地上の歴史として位置づけるための検討を行い、神代文字についても検討された。しかし学者委員は、参加者全員が神代文字に対して否定的だった。

戦後は、学術研究者は神代文字等が含まれる古史古伝（学術研究界では「偽史言説」としている。）を偽書として研究対象とせず、研究を続けたのは、神代文字の支持者、批判者のいずれも、学者以外の在野の研究者たちであった。しかし最近、歴史的根拠がない『江戸しぐさ』が学教教育に取り入れられたり、偽史とされている『東日流外三郡誌』が村発行の歴史資料に収録されるなどの問題が発生、学術研究界も偽史言説を近代日本、現代日本の重要な一部を映す鏡として研究に参画し、2015年11月には、立教大学日本学研究所主催で、公開シンポジウム「近代日本の偽史言説 その生成・機能・受容」が開催され、神代文字問題や、ユダヤ同祖論問題を現代の問題としてとらえ、論じられた。

この項の参考文献：『近代日本の偽史言説』（小澤実編）の
「序章 小澤実」及び「第4章長谷川亮一論文」



資料：宮下文書中の神代分事（神代文字）と神代古問場（神代ことば）

参考2 宮下文書に書かれている富士山麓の歴史

この項は、参考3に記載した各種文献を参考にまとめたものです。

① 日本の開闢物語 宮下文書には、全く異なったの開闢物語がある

宮下文書は、多くの文書の寄せ集めであり、各文書の内容に矛盾が見受けられる。開闢物語も、次の大きく異なった二つのストーリーがある。

一つは、須弥山不二蓬莱山（富士山）に神が現れ、ここを神都として天之の世7代、天之御中の世15代、高天原天神七代を経てイザナギ、イザナミが出現したとする書。大正時代に書かれた『神皇記』ではこれを採用している。

もう一つは、蓬莱山高天原（これも富士山と考えられる）から太昊伏羲が大陸の大中原に天下り、その孫の農立（＝国常立尊）農狭（＝国狭鎚尊）が大陸から日本の富士山にやってきて、高天原の都を築き、その子がイザナギ、イザナミとする書である。

イ 開闢以来、イザナギまで七代+十五代+七代であるとする文書

古事記、日本書記（以下、「記紀」と書く）の神話では、神々の実質的な始まりは、イザナギ、イザナミからであり、それ以前の神々については、明確に記載されていない。しかし宮下文書には、イザナギに至るまでの開闢物語として何代もの夫婦神が具体的に記されている。

宮下文書の「天地開闢神代略暦」に記された天地開闢物語は、次のとおり。

「天地開闢の元は、須弥山不二蓬莱山の峯に、火と熱と共に神種が現れ、四方に富が長く栄えた。これを天の世と言う。又、須弥山不二蓬莱山中央高間の大原を神都と定め、留ったので、これを天之御中の世と言ひ、後に、この都を高天原と言った。

その後、四方の大島小島に神種は広く広がり、大いに栄えたので、豊阿始原瑞穂の国の世と言った。」

この時代、**天之世七代は30万日続き**、現れた神々は天之峯火火神、天之高火男神 天之高地火神 天之高木彦神、天之草男神、天之高原男神、天御柱彦神である。その後**天之御中の世が十五代17万日続き**、現れた神々は天之御中主神、高皇産霊男神、宇津峰彦神、宇摩志葺茅比古神、天之常立比古神である。さらにその後、高天原世天神七代が続き、現れた神は、国常立尊、国狭槌尊、白龍清、宇比知仁命、津野久比命、穗火斗地命、尾茂太留命、伊佐那岐命（婦人神は伊佐那美命）

上記の神々にはいずれもそれぞれに婦人神の記されているが、記紀と異なり神々や、その後の天皇もほとんどが一夫一婦であり、極めて現在の倫理観に沿ったものだ。

ロ 富士山から大陸に人（神？）が天下ったとする文書

宮下文書の「支那震旦記等」に描かれたストーリーは、前記の開闢物語とは全く異なる。「太昊伏羲」は古代中国神話に登場する神または伝説上の帝王であるが、なんと太昊伏羲は、蓬莱山高天原から、大陸の大中原に天下ったというのだ。日本の富士山から、中国の中原（中国文明の発祥地）に天下った、ということは、太昊伏羲は日本人であり、中国皇帝もその子孫ということを言いたいのだろうか？

ここに限らず、宮下文書は、日本の中心、世界の中心が富士高天原にあることを、一貫して主張している。

② 九州遷都 大陸との戦争の時代

ニニギの時代から、大陸からたびたび筑紫島（九州と考えられる）に軍勢が攻め込んで来たが、そのつど皆殺しにするなど撃退してきた。宮下文書の他の部分からみても大陸とは中国を指していることは間違えないだろう。ニニギの息子のヒコホホデミ（山幸彦）の時代に、再度西の大陸から筑紫に大軍が攻めてきたので、防御を固めるため、都を筑紫に移し、息子のウガヤフキアエズを即位させた。ニニギは主な家臣とともに富士山高天原に止まった。

なおウガヤフキアエズは、古事記日本書記では一人の神であるが、宮下文書では「ウガヤフキアエズ」という同じ名前の神が51代904年続いたとしている。神皇が崩御すると、そのたびに皇子を筑紫（九州）から富士山高天原に送り、阿祖山大神宮で即位の儀式を行い、また筑紫に戻って政務を行った。すなわち、九州遷都後も、富士高天原は、精神的、宗教的な首都であったと宮下文書は主張している。

③ 檀原遷都 神武天皇が国内を平定

第51代ウガヤフキアエズは、第四皇子の日高佐野王と供に、賊軍を討ちながら東征した。古事記日本書記と大きく異なるのは、賊軍の一部に新羅軍が加わり国際戦争だったとしていることだ。

東征を成し遂げた日高佐野王は、大和国檀原で、紀元元年2月11日、即位し神武天皇となった。なお、2月11日という日付は、明治6年に明治政府が決めたことであり、このこの日付が入っていることが、偽書である根拠とされている。

この時は三品の大御宝（三種の神器）まだ富士高天原にあったので、これを大和に持って行き、即位式が終わると再び富士高天原に戻した。これを10代崇神天皇の代まで繰り返したが、崇神天皇の時代、笠縫に新宮（天照皇太神宮）を建設し、三品の大御宝の模造品を作成し、これを新宮に収めた。

（注：笠縫邑（カサヌイノムラ）とは、日本書紀で、崇神天皇が天照大神を皇女豊鍬入姫命（とよすきいりひめのみこと）に祭らせたと伝える倭（やまと）の地。奈良県磯城（しき）郡田原本町新木（にき）、桜井市内などの説がある。）

宮下文書によるとこの時代も、高天原の阿祖山太神宮は健在で、神武天皇の勅命によって全国の神社を調査した結果、阿祖山太神宮は摂社250社、末社350社という、全国のお神社の中でも圧倒的な大きさの規模で、中心的な存在である。

④ 孝霊天皇時代 徐福が来日し、富士山へ

宮下文書によると、徐福はインドで仏教を学んだあと、始皇帝に仕え官位も上がった。孝霊天皇の時代に、始皇帝の命で不老不死の霊薬を探しに童男童女500人と供に旅立ち、紀伊を経由して富士山麓を訪れた。徐福はこの地で残された歴史や系譜の記録をまとめた。これが現在ある宮下文書とされている。

徐福の家族は、長男福永、二男福満（後に福島と改名）などで、徐福の子孫がその後歴史の記録を記した。また一部は紀伊の熊野に移住してここを開墾し、徐福の霊を祀った。徐福の子孫の多くは秦姓とし、姓の一部に福の字を付けた。」

なお、「徐福はインドで仏教を学んだ」などということは時代的にありえないことは、宮下文書の支持者も指摘している。（『富士王朝の謎と宮下文書』伊集院卿著）。また始皇

帝に仕え官位も上がったなどということも、史記の記述とは異なる。

富士山麓の羽田氏は徐福一行の子孫であるとの説があるが、羽田武栄・広岡純著『真説徐福伝説』によると、富士山麓の羽田姓は、渡来人系ではあるが、徐福の時代に日本にきたのではない、としている。

また、連れてきた童男童女の名簿も整っている。中には、忠時、貞治、貞彦、忠子、長子、長正などがあり、紀元前の中国や日本の名前とは思えない名前だ。

徐福伝説とは？

中国前漢の武帝の時代に司馬遷によって編纂された中国の歴史書である『史記』（※1）の巻百十八「淮南衝山列伝」の記述によると、方士（神仙、医薬、保健、撰生の技を持つとされており、神仙思想は後の道教の基盤となった）である徐福は秦の始皇帝に、「東方の三神山に長生不老（不老不死）の霊薬がある」と具申し、始皇帝の命を受け、3,000人の童男童女（若い男女）と百工（多くの技術者）を従え、五穀の種を持って、東方に船出したまま戻らなかった。との記述がある。

この『史記』が徐福伝説の出発点です。中国には徐福の故郷や出港地の徐福ゆかりの地があり、日本には徐福が到達したところ、訪れたところなどの伝説がある。

文献で最初に「徐福が日本に来た」との記述は960年頃、中国で書かれた仏教書である『義楚六帖』だと言われ、日本から来た僧侶に聞いた話として、徐福が蓬莱山、すなわち富士山に来たことが記されている。このころから日本に徐福伝説があったことがわかる資料であるが、徐福の時代から千年以上もたっており、歴史の資料とはなりえない。考古学的にも、当時の文字資料などがあるわけではなく、徐福が本当に日本に来たかどうかは、歴史的には確認できていない。しかしこの時代、朝鮮半島はもちろん、大陸からも人が来たことは多くの考古学者が指摘している。

⑤ 延暦、貞観の噴火 神都高天原は溶岩の下に埋もれる

宮下文書によると、桓武天皇延暦19年(800年)に富士山が噴火し、神社仏閣、人戸、草木鳥獣魚虫まで、富士山の周りは二十里四方が溶岩のため消滅した。甲斐国八代郡は、神社仏閣、人戸は全滅。剡の湖は、溶岩が流れ込んだので半分となった。

清和天皇貞観六年(864年)再び大噴火。剡湖は再び溶岩が流れ込み、三湖となり、魚は皆死んだ。富士山の度々の噴火によって富士山中央高天原阿祖山谷三室の人家は皆消滅してしまった。神代開闢よりの古蹟を残す為、わずかに二所七社名神大社並びに七社惣廟浅間（先元）明神大社を再興したのみだった。

宮下文書には、噴火の様子を絵図面入りで詳しく記されている。富士山の噴火は、特に延暦の噴火は記録が乏しく、火山学者も新しい発見の可能性を求めて宮下文書を詳細に検討したが、多くが地質学的にあり得ないことであることが判明した。

(静岡大学防災総合センター教授小山真人の論文「富士山延暦噴火の謎と『宮下文書』」による)

⑥ 阿祖山太神宮の変遷

(この項は、別冊歴史読本『危険な歴史書「古史古伝」(人物往来社 2000 年)の「物語的偽書『宮下文書』の重層構造」、藤原明著 等を参考にした。)

宮下家の奉斎したとされる阿祖山太神宮(七座の宮からなり、富士七廟ともいう。以下太神宮と略す。の鎮座した太古の神都・加吉(かきつ・のちの甲斐国都留郡)は延暦 19 年(800 年)の富士山の噴火によって、溶岩流の下に埋没した。

この大噴火の際、太神宮は、甲斐国八代郡と山梨郡の中間の中山、駿河国本沢、相模国高座郡早乙女郷田原にそれぞれ避難し、駿河には富士山北本宮神部山浅間神社(現、静岡県富士宮市宮町の富士山本宮浅間神社)、相模には富士山東本宮寒川神社(現、神奈川県高座郡宮山の寒川神社)を造営した。これを富士山三本宮と称する。太神宮宝蔵の文献宝物は、宮下家第 26 代源太夫元秀が避難をする際に持ち出し、元秀ともども相模の寒川神社に落ち着いた。

延暦 19 年(800 年)の大噴火以来、都留郡は土地荒廃し、人跡希薄となったため、延暦 22 年(803 年)都留郡を三分して、付近三郡(甲州八代郡・山梨郡、相州津久井郡の三郡とする)に編入した。この時太神宮も甲州八代郡に編入された。大同元年(806 年)勅使下向。太神宮七座を再興し、本宮の相州寒川神社の祠官に三座の宮守、甲州神部山の祠官に四座の宮守を命じ、それぞれの出仕するための館を二カ所設けた(これを二所明神という。なお、再興された太神宮を山宮、他の三本宮を里宮と呼んだ。)

貞観 6 年(864 年)、再度の噴火によって、太神宮は消失。再興されたものの、太神宮への道路が失われ、勅使はやむなく駿河の富士山表本宮浅間神社に奉幣して西帰するなど、太神宮への参詣者も次第に跡を絶ち、駿河と相模の二分社が栄えるようになった。

天曆元年(947 年)八代郡・山梨郡の境界が変更され、山梨郡の神部山浅間神社の鎮座地が八代郡に編入された。

建久 6 年(1195 年)源頼朝により、付近三郡に分割された都留郡を復活した際、太神宮も都留郡に復帰した。

神奈川県郷土史からの検証

① 「津久井郡」は明治時代に成立。宮下文書では古代に津久井郡があった？

鎌倉時代初期、三浦半島に津久井村があったが、ここに住んでいた三浦一族の一人が津久井氏を名乗り、その後今の相模原市津久井町近辺を領地とした。このことから、この地が津久井領となった。郡としては、愛甲郡、高座郡の一部であったが、江戸幕府にとって特別な地域であったため、江戸時代元禄年間に独立し全国でも珍しい「津久井県」となった。明治時代初めて「津久井郡」となった。

古代から津久井郡があったなどいうことはありえない。

(参考：日本歴史地名大系 14)

② 寒川神社は水神であり、阿祖山太神宮との関係は確認できない。

寒川神社の神は寒川の湧水、相模川を祀る水神であり、現在も本殿奥にご神体としての湧水がある。寒川神社が富士山を祀る阿祖山太神宮(浅間神社)と関係があるというのは、宮下文書以外の文献からは確認できない。

参考 3 宮下文書に関する参考文献

1. 『神傳富士古文献大成』昭和 61 年（1986 年）八幡書店
宮下文書原文をそのまま写真製本したもの。ほとんど漢字であり読みにくいが、文法は現代文に近く、慣れると古文書の知識が乏しくとも読めるようになる。富士吉田市立図書館で蔵書。
2. 『富士文庫 第一巻』 大正 9 年(1922 年)
宮下文書の研究を目的とする財団法人富士文庫が出版した報告書。発見者である宮下源兵衛氏の文もあり、宮下文書研究に欠かせない書。富士吉田市立図書館で蔵書。
3. 『神皇紀』 大正 10 年（1921 年） 『現代語訳神皇紀』2011 年出版
三輪義熙（よしひろ）氏が『宮下文書』の内容をダイジェスト版としてまとめ、『神皇紀』として出版した。この『神皇紀』は、神奈川徐福研究会が、現代語訳を行い、現代語訳『神皇紀』として 2011 年に出版した。
4. 『謎の宮下文書』佐治佳彦著 1964 年
昭和時代の宮下文書を支持する立場での解説書であるが、高天原は西アジアとするなど、宮下文書を独自に解釈しており、現在でもある宮下文書の拡大解釈の原因となっている。
5. 『富士山の噴火一万年から現代まで』都司嘉宣著 築地書館 1992 年
火山学者の立場で、宮下文書の火山記事を検証したもの。
6. 別冊歴史読本『危険な歴史書「古史古伝」』 人物往来社 2000 年 10 月
宮下文書を含む古史古伝を、支持する論と、偽史として批判する論を掲載。
7. 『偽書学入門』 2004 年 5 月 柏書房久野俊彦編
「近代の偽書ー“超古代史”から、「近代偽撰国史」へ」藤原明著
宮下文書、秀真伝（ほつまつたえ）、上記（うえつふみ）、竹内文書等を、近代に書かれた偽書とし、その背景を考察している。
8. 『図説 神代文字入門』 原田実著 2007 年 2 月 ビイニング・ネット・プレス社
宮下文書を含む、神代文字の研究。神代文字を具体的に解説している。
9. 『危険な歴史書「古史古伝」と「偽書」の謎を読む』人物往来社 2012 年 3 月
古史古伝全般の解説書
10. 『探求 幻の富士古文献』 渡辺長義著 今日の話社 2012 年 12 月
宮下文書を支持する立場での紹介と解説。
11. 『富士王朝の謎と宮下文書』伊集院卿著 学研 2014 年 3 月
近世に書き換えられたことは認めており、その中にも真実の歴史が含まれる、と推測している。
12. 『近代日本の偽史言説』小澤実編 勉誠出版 2017 年 11 月
学術研究者が執筆している。宮下文書を含めた「偽史」に関する論文集